

太閤記を読む

豊臣秀吉（1537～1598）は尾張国愛知郡中村（名古屋市中村区）で生まれたと伝えられています。十代の頃に永楽銭一貫文を元手に木綿針の商いを始め、やがて信長に仕え、草履取りから次第に出世していくなど、数々のエピソードが小説やテレビドラマ・映画で描かれてきました。元になっているのはいわゆる「太閤記」とよばれている秀吉の伝記。江戸時代前期に複数のものが作成され、その後、人々の出世物語へのあこがれを反映して数多くの文学作品が生まれました。中村図書館が所蔵する「太閤記」についてご紹介します。

※書名の横の〈 〉内は資料のある場所を表しています。

1. 大村由己の『天正記』

〈秀清〉→秀吉清正コーナー

その名のとおり天正年間における秀吉の事蹟を記録したもので、秀吉の命令により大村由己が作成した。大村由己は秀吉の御加衆^{おとぎしゅう}または御咄衆^{おはなししゅう}（主君の前で本を読んで聞かせたり、講釈したりする役）とみられ、自ら「天正記」を作り、秀吉の前でそれを読んで聞かせたと考えられる。1巻の「播磨別所記」の奥付に天正8年正月とあり、秀吉が生きていた時代に秀吉に非常に近い人物によって書かれた記録と言える。後の小瀬甫庵^{おせ ほうあん}の『太閤記』もこれを参考にしている。

📖 『天正記』（戦国史料叢書1 太閤史料集）新人物往来社 1965 〈秀清 2104〉

2. 太田牛一の『太閤軍記』

織田信長、豊臣秀吉、秀頼に仕えた太田牛一は、信長の記録『信長記』^{しんちやうき}の著者として知られている。現存の自筆本「大かうさまくんきのうち」から、太田牛一による秀吉の伝記『太閤軍記』が存在したことが推定でき、その一部分が後世に伝わった。大村由己の『天正記』と比べると文禄年間とそれ以降の記事が多く、とりわけ関白秀次に関する記述が詳しい。『天正記』と同様、秀吉が生きていた時代の記録であり、後のさまざまな『太閤記』に影響を与えた。

📖 『太閤さま軍記のうち』（戦国史料叢書1 太閤史料集）新人物往来社 1965 〈秀清 2104〉

3. 『川角太閤記』

元和7年（1621）頃の著作で、作者は秀吉の武将田中吉政の家臣川角三郎右衛門と考えられている。明智光秀の謀反から関ヶ原の戦いまでの史実の「聞き書き」をまとめた。伝記としては未完成な形ではあるが、秀吉と同時代を生きた人々からの聞き書きを元にしており、当時の様子を伝えている。

📖 『川角太閤記』（戦国史料叢書1 太閤史料集）新人物往来社 1965 〈秀清 2104〉

※現代語訳で読むなら

📖 『川角太閤記』 志村有弘著 勉誠社 1996 〈秀清 21047〉



4. 小瀬甫庵の『太閤記』

小瀬甫庵は江戸時代前期の医師で、豊臣秀次に仕えた。秀次亡き後は各地に移住し、寛永2年（1625）「太閤記」22冊を著わした。秀吉の誕生から慶長3年までの記録で、大村由己の『天正記』や太田牛一の「大かうさまくんきのうち」などの記録を参考にしている。狭義で「太閤記」という場合はこれのことを指す。秀吉の父は愛知郡中村の住民で筑阿弥といい、母が胎内に太陽が入る夢を見て妊娠して誕生、幼名は「日吉丸」。主君松下氏から甲冑を買ってくるようにと渡された金を持ち出し、信長に仕え武士となることをめざしたとある。

📖 『太閤記』（新日本古典文学大系 60）岩波書店 1996 〈918〉

※現代語訳で読むなら

📖 『太閤記1～4』（教育社新書 原本現代訳）教育社 1979 〈秀清 2891〉

5. 『太閤真蹟記』

講釈師（講談師）白栄堂長衛編。12編360巻。天明7年（1787）頃、大阪で「大功真蹟記」という歌舞伎が上演された。その元になったとかがえられる豊臣秀吉の一代記。文章は講釈風。

※和装本あります（貸出不可）

📖 『太閤真蹟記 初篇1～12篇30』江戸後期 写本〈書庫 秀清 2891〉

6. 『絵本太閤記』

武内確斎作 岡田玉山画。初編寛政9年（1797）刊。全7編84巻。「太閤真蹟記」などの写本を要約し、1、2ページ毎に挿絵を入れて平易な文章をつけた秀吉の一代記。日吉権現の靈験によって母「なか」が懐妊した日吉丸誕生をはじめ、有名な千成瓢箪の馬印など、史実というよりは創作されたエピソードが多い。江戸時代後期に大衆的な読み物として大流行した。

※和装本あります（貸出不可 秀吉清正記念館にて展示中）

📖 『絵本太閤記 初篇1～5篇12』1797～1800 〈書庫 秀清 9135〉

7. 『絵本大功記』

寛政11年（1799）に大坂の道頓堀で初演の人形浄瑠璃。当時のベストセラー『絵本太閤記』を浄瑠璃化したもの。『絵本太閤記』および『太閤真蹟記』を元に、武智光秀（明智光秀）の小田春長（織田信長）への謀反、真柴久吉（羽柴秀吉）の高松城水攻めなどが描かれている。物語の主人公はどちらかというと明智光秀で、その悲劇を描いた「尼が崎の段」は有名。

📖 『近松半二江戸作者浄瑠璃集』（新日本古典文学大系 94）岩波書店 1996 〈918〉

8. 栗原柳庵の『真書太閤記』

幕府の御家人であった栗原柳庵（寛政6年～明治3年）が、講談の種本『太閤真蹟記』を元に、甫庵の「太閤記」をはじめ、「豊鑑」「豊臣秀吉譜」「絵本太閤記」等を参考としてまとめた歴史読み物。嘉永5年（1852）に初篇及び2編が江戸の知新堂から出版され、明治に至って12編360巻を以て完成した。写本として広まっていた「太閤真蹟記」に註を加えて『重修真書太閤記』と改題した。もともになっているのは講談本であり荒唐無稽な記述が多く、史実と創作を混同して考証している。

※和装本あります（貸出不可）

📖 『重修真書太閤記 4篇1～9篇10』栗原柳庵校訂 知新堂 1858 〈書庫 秀清 2891〉

9. 矢田挿雲の『太閤記』

金沢市出身の小説家矢田挿雲（1882～1961）の長編小説。大正14年から昭和9年まで「報知新聞」に連載されたもので、秀吉の幼少期から往生までを描いている。『太閤記』を大衆文学として完成させた最初の作品であり、以後のさまざまな『太閤記』に影響を与えた。父は愛知郡中々村の木下彌右衛門、母は「お仲」。再婚相手の筑阿彌に気兼ねした母が、幼少期の秀吉「小猿」を光明寺に預ける。小猿は15才の時に亡父の残してくれた永楽銭一貫文を元手に木綿針の商いを始め、仕官をめざすという設定。

📖 『太閤記 1～12』 矢田挿雲著 中央公論社 1935 〈書庫 秀清F〉(貸出不可)

📖 『挿雲太閤記 1～10』 矢田挿雲著 再建社 1954 〈秀清F〉

10. ^{よしかわえいじ}吉川英治の『新書太閤記』

日本の大衆文学を代表する小説家吉川英治(1892～1962)の長編小説。昭和14年から「読売新聞」に「太閤記」を連載、昭和20年8月の終戦でいったん中止し、その後地方紙に「続太閤記」を発表した。現在の『新書太閤記』はそれらを合わせたもの。秀吉誕生から小牧・長久手の戦いが済んだ天正13年あたりまでを描いている。1965年に放映されたNHKの大河ドラマ『太閤記』(緒形拳主演)の原作。

📖 『新書太閤記 1～11』 吉川英治著 六興出版 1991 〈秀清F〉

📖 『新書太閤記 1～11』(吉川英治歴史時代文庫 22～32) 吉川英治著 講談社 1990 〈秀清F〉

11. ^{やまおかそうはち}山岡荘八の『異本太閤記』

山岡荘八(1907～1978)の長編小説。秀吉23才から62才で没するまでを描いている。著者は前書きで「これは時に作者が太閤さまとホラ比べをしていく諷刺小説でありユーモア小説でもある」とし、「暇なおりに退屈させないようにというのが狙い」と述べている。明智光秀が山崎の戦いの後も生存する設定。

📖 『異本太閤記 1～7』 山岡荘八著 講談社 1965 〈秀清F〉

📖 『豊臣秀吉 1～8』(山岡荘八歴史文庫 15～22) 山岡荘八著 講談社 1987 〈秀清F〉

12. ^{かいおんじちようごろう}海音寺潮五郎の『新太閤記』

海音寺潮五郎(1901～1977)の長編小説。秀吉の幼名を「日吉丸」ではなく「与助」とし、十六の時に家を出て、母からもらった永楽銭で縫い針を仕入れ商い、遠州松下家を経て信長に奉公、「木下藤吉郎」と名乗ったとしている。秀吉の青年期から秀頼誕生までを描き、それ以後晩年までは「叙述するのは忍びない」と略述している。

📖 『新太閤記 1～4』 海音寺潮五郎著 文芸春秋新社 1965 〈秀清F〉

13. ^{しばりょうたろう}司馬遼太郎の『新史太閤記』

司馬遼太郎(1923～1996)の小説。物語の初めは中村区近辺が舞台となり、秀吉は尾張中村に生まれ、^{かやつ}萱津村の光明寺に預けられている小僧として登場。亡父の遺した永楽銭一貫文を元手に木綿針を仕入れ放浪、浜松の松下嘉兵衛に仕え、尾張の織田家をめざす。秀吉の少年期から天正14年10月の家康上洛までを描いている。

📖 『新史太閤記 前篇・後編』 司馬遼太郎著 新潮社 1968 〈秀清F〉

📖 『新史太閤記』 司馬遼太郎著 新潮社 1992 〈秀清F〉

14. 太閤記や秀吉の伝説についてさらに知るなら ～ほかにこんな本があります～

📖 『太閤記の研究』 桑田忠親著 徳間書店 1965 〈秀清 2891〉

桑田忠親(1902～1987)は戦国時代史、特に茶道史の研究者。昭和15年に秀吉の伝記を系統的に研究した『豊太閤伝記物語の研究』を出版。本書はその訂正・増補版。秀吉の文書をはじめ、大村由己の『天正記』から吉川英治の『新書太閤記』までの秀吉の伝記を多数解説している。



📖 『秀吉神話をくつがえす』 藤田達生著 講談社 2007 〈秀清 2891〉

貧しい百姓から天下人になった豊臣秀吉の一代記は、秀吉自身によって創作された物語を原型に、後世の人々がその時代のニーズに応じて改変を加えてきたもの。本書は史料を元にその変遷の過程を詳しく検証し、秀吉の出自、本能寺の変、天下統一事業についても追及する。巻末に多数の参考文献が挙げられている。

📖 『秀吉伝説序説と『天正軍記』(影印・翻字)』 追手門学院大学アジア学科編 和泉書院 2012
〈秀清 2891〉

追手門学院大学(大阪府茨木市)のアジア学科の教員の研究会による「秀吉伝説」に関する論考を集めたもの。江戸時代の版本『天正軍記』(大村由己の『天正記』と太田牛一の『大かうさまくんきのうち』の合冊)の影印本も掲載。小瀬甫庵の『太閤記』をはじめ、司馬遼太郎の『新史太閤記』を読み解く。

📖 『秀吉の出自と出世伝説』 渡辺大門著 洋泉社 2013 〈秀清 2891〉

小瀬甫庵の『太閤記』では、母が胎内に日輪が入った夢を見て妊娠し、秀吉が誕生したという。その他にも一夜で城を築いたという「墨俣一夜城」など、現実的に不可能ではないかと疑われるエピソードも多い。こうした秀吉の逸話や伝説を史実と照らし合わせて検討し、秀吉の実像を明らかにしようとした本。従来の親しみやすい秀吉像とは別の顔が浮かび上がってくる。

📖 『秀吉研究の最前線』 日本史史料研究会編 洋泉社 2015 〈秀清 2891〉

小説やドラマで描かれ、「太閤検地」や「刀狩」といった用語とともに教科書に登場する秀吉については、私たちの中に一定のイメージが出来上がっている。しかし近年の研究では、従来の秀吉像を修正するものが発表されてきている。秀吉に関する16のテーマについて、最新の研究成果を紹介した本。

中村図書館 秀吉清正コーナーのご案内

中村図書館の一番奥に秀吉清正コーナーがあります。

中村区にゆかりの深い豊臣秀吉と加藤清正に関する資料が集めてあります。文化プラザ2階の秀吉清正記念館では歴史資料を収集しますが、中村図書館では刊行された図書を集めています。

江戸中期に刊行された『絵本太閤記』から吉川英治の『新書太閤記』など、一般書、児童書、マンガなどジャンルを問わずそろえています。

秀吉清正記念館とあわせてぜひ、お立ち寄りください。



参考：『国史大辞典』 吉川弘文館 1979-1997

『日本古典文学大辞典』 岩波書店 1983-1998

『日本近代文学大事典』 講談社 1977

『太閤記の世界』 名古屋市秀吉清正記念館編 名古屋市秀吉清正記念館 2000

『太閤記の研究』 桑田忠親著 徳間書店 1965